

## 平行線の季節

倉間 利津

平行線だと思った。

落ちる、差し込んでくる。

透明なのに、金色に輝く光のような。

真つ直ぐな、平行線。

それは階段だった。アパートの階段。建物の中央、ガラス張りの部分に同じ角度で三つ、平行線を描いて並んでいた。この左右にあるブロックが住居スペースだろう。ガラス張り、などと聞くと少し新しい外観を思い浮かべるかもしれない。しかしそうではない。ささくれだち、ところどころにヒビが入っている煉瓦造りの建物だ。四階建てのそれは、濃い茶色と年月のためか、実際より少し大きく見えた。

入り口は一つ。あまり似合っていない回転扉が、ガラスに溶け込むようにしてある。通り抜けると、耳が痛くなるような音がした。

平行線、煉瓦、普段見かけない形の扉。私の心臓は否が応でも高鳴ってしまう。そして、十年以上ぶりに再会する叔父——。

建物の丁度中央から階段は伸びていた。深呼吸をして、私は上り始めた。

親類中で一番の厄介者——父が言うには、それが叔父だった。

私には少しぴんとこない。叔父に迷惑を掛けられたり、掛けられた人を見たことがないからだ。強いて考えるところならば、叔父がめつたに姿を見せないということぐらいしか浮かばない。私が彼と会ったのも、一度つきり。それも、もう十年以上昔の話だ。あれは、八歳の誕生日のことだった。

その日は日曜日で、夜に父の予定が入っていたから、誕生会が昼に行われた。会と言っても、友達を呼ぶような大袈裟なものではない。真つ白なクリームに赤いイチゴのケーキを、家族三人、父と母と私でこじんまりと囲むだけのものだった。

今でも、あの時のことはよく憶えている。思わずうたた寝してしまいそうなくらい、陽気の暖かな五月だった。ロウソクの明かりが綺麗に見えるよう母は部屋のカーテンを全部閉じて、父が買ったばかりのカメラを構えていた。そして私が火を吹き消そうとした時、「やあ」とカーテンを捲って叔父が顔を覗かせたのである。

私達はとても驚いた。驚きのあまり、返事も出来な

った。叔父の方はというと、何でもないような調子で靴を脱ぎ、すでに開いていた窓から家の上がり込んでいた。そのままテーブルについている私の方に向かってきて、持っていたピンク色の紙袋を差し出す。

「おめでとう、カナちゃん」

私は渡されるままにそれを受け取った。紙袋は大きく、重くはなかったが両腕でバランスをとるのが大変だった。私は袋を抱えたまま、ありがたうとも何とも言えなかった。ここにきて両親はようやく状況を理解したらしい。彼に感謝を述べ、誕生会に参加するように勧めた。けれど彼はそれを断って、来た時と同じように窓から帰っていった。彼が「それじゃあ」と、言った瞬間強い風が吹き込み、八本のロウソクが全て消えた。

こうやって思い出してみると、迷惑な人ではないがおかしい人ではあったのかもしれない。

プレゼントに貰ったのは、ティディベアだった。アイボリーに紫色の柄がついた布で作られている。毛がないから埃が散らなくいい、と母は喜んでいた。大きさはその当時の私にしては大きく、立たせれば自分の背丈の半分以上あった。首には茶色のリボンが巻かれていて、その中央にある金色のプレートにティディの名前が彫つてある。何でお前ののに別な名前なんだ、と父は訝しんでいた。貰ったばかりの頃は、地味な縫いぐるみだと思ひ、気に入らなかつた。友達が持っている長い毛がモコモコし

たようなのとか、睫毛をつけたりほっぺにハートを描いても洗って落とせるやつだとか——当時の私にはそういうものの方が魅力的だった。

縫いぐるみは丈夫な作りで、ちよつと乱暴に扱っても手足と胴体を繋ぐボタンとか、目とかが取れることはなかった。アイボリーと紫は年を追うごとに色を濃くし、深みを増していった。幼稚だった私の好みもいつしか変わり、今はこの縫いぐるみを心から愛しく思っている。

そんな、ちよつと変人で、親類には厄介者扱いされているけれど、素敵なプレゼントをくれた私の叔父。今日、その叔父に会いに来たのは、入学手続き書の保証人欄に、署名と印鑑を貰うためである。高校入学の際の保証人は、母方の叔母だった。しかし彼女は夫の転勤により海外に引越してしまったため、今は叔父に頼るしかないのである。

一週間程前から、父は叔父に何度も連絡を試み、そして昨日ようやく話すことが出来た。叔父は仕事が忙しいらしく、会えるのは今日の昼間だけと言った。今日は平日で、サラリーマンの父も、パートを始めたばかりの母も忙しい。そんな訳で、私は叔父の住むアパートの階段を一人で上っている。

あと少しで叔父に会える。一步踏み出すごとに心臓が跳ねた。それに合わせてリノリウムの床がコツンと鳴る。ガラス張りなので、日の当たる階段は温室のように暖か

かった。踊り場に出る。そこには左右に一つずつ扉があつて、それぞれ表札が下げられていた。階段からすぐ部屋に繋がる仕組みらしい。変わった造りに、思わずへえと溜め息が出る。左にある扉の前に置かれた観葉植物が、緑の葉を輝かせていた。もうすっかり春だな、なんてことを思う。緊張してもいるが、嬉しいのだ。

昨夜も何となく眠れなくて、貰ったテディを抱き、ベッドの隅に腰掛けていた。そうしていたらふと思ひ出して、私は机の一番小さな引き出しを開けた。そこには、主に友人などから貰った手紙が仕舞つてある。ついこの前、卒業式の時に貰った青い封筒や、牛乳瓶やイチゴの形に折られたたくさんのメモ用紙——これらを取り出して、私は底の方にあるそれを見つけた。古いけれど、まったく擦り切れもしていない一枚のベースデーカード。私が叔父から貰った、唯一の手紙である。テディに巻かれたリボンに挟んであったものだ。触れば少しざりする、上品な質感。ペーージュ色に、テディの柄と同じ紫色の字が踊っている。

そこにはこうあつた。

『カナちゃんへ』

8さいのおたんじょうびおめでとう。

8つていうのは、ふしぎな数字だね。ずっと、ずっと、ぐるぐる、えいえんに回っていられる。ぼくは8のこういうところが好きなんだ。

どうしてだろうね。

8さいになつたばかりのカナちゃんにはわからないことだと思ふし、じつはぼくにもわからない。

ただ1つ言えるのは、カナちゃんはいつまでも8さいじゃないってことなんだ。だから答えがわかったら、ぼくに教えてくれるかな。

やくそくだよ。

おめでとう、カナちゃん。

ぼくのテディをだいじにしてね。

おじちゃんより』

あの時の私は、書いてあることの意味がいまいちつかめなかつた。考えることを諦め、カードをすぐ引き出しの中に放り込んでしまった。両親に見せれば意味が分かつたのかもしれない。けれど、やくそく、という四文字が私にそれをためらわせた。その手紙からは、秘密というものが持つ、懐かしくて甘い匂いがした。

四階の踊り場も二階と同じ造りだった。左のドアを見る。表札には叔父一人の名前がポツンとあつた。私はすぐ横についていたチャイムを押す。ピンポーン、という平凡な音に続き、足音が聞こえた。

叔父の頭の中には八歳の頃の、小さな私しかない。

こんなに大きくなった今の私を見て、どんな反応をするだろう。私は十年遅れのありがとうを、きちんと口に出せるだろうか——。胸の中を期待と不安とが駆け巡り、

そして、扉が開いた。

扉が開いた瞬間、私はただ驚くことしか出来なかった。何故なら、そこにいる人物が女だったからである。長い髪に、白いつくりのセーター、こげ茶色のロングスカート。人物は、どこからどう見ても叔父ではなかった。「だ、れ？」

その女が言った。彼女の方もとても驚いた顔をしている。四十歳は過ぎているだろう叔父のもとに、私のような十代の少女が訪ねて来たからだろうか。

「私は、ケンジ叔父さんの姪です。今度、大学に入学するので、保証人になって貰おうと思って」

「まあ、そう。おめでとう。でも、今あの人はいないの」「えっと……そうなんですか？」

私は戸惑うばかりだった。父は確かに、私が今日、叔父の家に行くと告げたはずである。しかし叔父は不在で、代わりに見知らぬ女がいる。

この時改めて、私は叔父について何も知らないのだと気づいた。厄介者と言われるからには、独り身なんだと勝手に思い込んでいた。そういえば彼がどんな仕事をしているのかも知らない。平日の昼間家にいると言い、父に疑われぬ仕事とは、一体何だろう。

「とりあえず、上がったら？」

「あ、はい。お邪魔します」

狭い玄関には、さつき女が履いていたどこにでも売っているようなサンダルと、上品な茶色の革のパンプスが並んでいた。私はサンダルの横に自分のスニーカーを置く。玄関から伸びる廊下は台所と一緒にになっているものだった。

「汚いところだけれど、どうぞ」

女が突き当たりの扉を開けて私を招く。部屋に入った瞬間、私は息を呑んだ。

その空間はとてもアパートの一室だとは思えないものだった。

部屋に足を踏み入れた途端、ドライフラワーの匂いに包まれる。強くはないが、肺に深く入り込んで身体を緩めさせる香り。風に揺れるカーテンに咲いたバラの刺繍。角の剥げたタンスの上に並ぶ、ウサギの花嫁と花婿や、おかしくもどこか寂しげなピエレットの縫いぐるみ。パッチワークのタペストリー。アイボリーのカーペットに転がる、縁にレースのついたクッション。この空間には不似合いなはずのコタツでさえ、花柄のカバーがお姫様のふんわりしたスカートみたいに見えて、違和感がない。「少し寒いから、遠慮しないでコタツに入って。窓、閉めるわね」

「ああ、はい」

女は窓を閉めると、台所に向かっていった。所在のな

「私はとりあえずコタツに入り、改めて部屋を見渡す。一日中見ても飽きないくらいもので溢れていた。そのどれもが、じつとりと染み込んだ紅茶のような、深く、いい色をしている。原色は一つもなかった。コタツの上にはミシンが載っていて、足を伸ばすと、踏む部分とコードが指に当たった。動かしては大変と、慌てて足を引っ込める。その時扉が開いた。」

「コーヒーは飲めるかしら？」

「は、はい。あの、」

再び扉が閉まる前に私は質問した。

「ここにあるもの、縫いぐるみとか、もしかして、全部手作りですか？」

「そうよ、とこともなげに返事が返ってくる。私はやはりと思いつつも驚いていた。ここにあるもの、全部。」

「洋裁が仕事なの。ここにあるのは売れ残ってしまったものとか、片手間に余った材料で作ったものよ。あとは、何となく手放せなかったものとかね」

「すごい、ですね……」

それしか言えなかった。

「ここはこの人が作った世界なのだ。そしてその世界を人に見せることで、生きていけるなんて。私が今感じている、懐かしさも安らぎも、この人が……。」

私は目の前に置かれたミシンを見つめる。黄ばんだ乳白色のそれは、今までの仕事を誇るかのように日の光を

受けて輝いていた。私の視線に気づいたのか、女は少し笑って、

「でも、そのミシンはお店で買ったんだけどね」

と言った。少し首を傾けたひょうしに、緩やかにウェーブのかかった髪が揺れる。ドライフラワールの香りが強くなった気がした。思わず赤面してうつむく。小花柄に、カーペットと同じ色のテディベアと目が合った。

「それじゃあ、印鑑とサインが必要なのね」

「コーヒーカップから唇を離し、私はぎこちなく頷く。それからすぐ口元にカップを持っていった。ミルクの入ったドリップコーヒーの、まろやかに甘くて苦い匂いが鼻をくすぐる。金に縁取られた白いカップはとても華奢で、両手で持たないと落ち着かなかった。」

「ちよっと待ってて」

「言いながら女はコタツから離れ、タンスの引き出しを開ける。心持ちこっそりと、私はその様子を見張った。何も語らない女の背中と、ガチャガチャとものを引っ掻き回す音。その音がこの部屋の雰囲気に合わせていなくて、胸がざわざわする。私は不謹慎なことを考えていた。女の背中が一瞬、他人の家に盗み入る、空き巣のように見えたなどと。私は空になったカップで口を隠す。そんなことあるはずがない。自分が恥ずかしくなるくらい、素

晴らしい女性だと思っっているはずなのに。けれどこの部屋に入ってきた時から、何かが胸の中でわだかまっていた。

しばらくして、あつたと小さな声上がる。振り向いた女の手には、印鑑の入ったケースとボールペンが握られていた。

「あの人、いつ帰るか分からないから。代わりに、私が別に筆跡鑑定なんてしないでしょ？」

「はい、そうですね。ありがとうございます。……これに、お願いします」

私はシオルダーバックからファイルを取り出し、中にあつた用紙をコタツの上に置いた。眩しい程白い紙に女の指が触れ、続いてサラサラとボールペンの滑る音がした。時間の止まったようなじつとりとした部屋の中で、代筆という行為が怪しく感じられる。それは罪悪感を伴わない、うんと小さな頃洋酒を一舐めた時のような、甘く幼い感覚に似ていた。

「あの、」  
小さな声にも女はすぐ反応した。長い睫毛に縁取られた黒い瞳。上目遣いに私を見つめる。

「あの、あなたは、叔父の、その……奥さんですか？」  
詰まった言葉を吐く。カチリ。壁掛け時計が、筆記の間違いを囁く教師のような指先で、三時を告げた。男の匂いが感じられないこの部屋に。寂しかった玄関にも、

この音は届いているだろうか。女の唇には、土の温みを感じるような色彩の赤が塗られている。私はそれが動くのを待った。

「私はあの人の恋人よ」

唇は機械のように動いて、みごとな笑みの形で止まる。長い息が漏れた。彼女は盗人でも、罪に胸をときめかす少女でもなくて。私は、何を考えていたんだろう。

「そう、恋人」

小さく呟く声が聞こえる。布のソーサーを用紙の下に敷いて、女は判を押した。私は感謝を述べながら用紙を受け取り、コタツから出た。さらにもう一度感謝を述べたから、ドアノブに手を掛ける。最後にと、部屋を見渡した。

黄昏の匂いを永遠に閉じ込めた部屋。えいえん。叔父に貰ったカード。紫色の字。あれはこの部屋で書かれたものだ、ふと思った。

「それじゃあ、叔父にも伝えてください。ありがとうございます」

私は頭を下げ、女に背を向ける。そしてドアノブを押した瞬間だった。

ふわり、と香る石鹸の匂い。確かな重みと熱が背に降り掛かる。首に巻きつく、人間の皮膚特有の柔らかなさ。

「私とてもとても幸せよ」

左耳に掛かる吐息。大した湿り気を伴っていないのに、

じわりとした感触を覚えた。潤んだ声音が鼓膜と心臓を揺らす。私は女に抱きしめられていた。

「でもね、きっとあなたが来ていなくなったら、死んでしまっていたような気もするの」

心地よい熱は離れた。自由になった身体が自然に女の方を向く。

「どうしてかしら。こんなに幸福なのに。仕事も上手くいっている。穏やかに過ごしている。なのに」

女の頬に一筋、真つ直ぐな涙の跡。僅かな煌きが私の目を射る。

「あの人に、会えないからかしら」

今度は前から抱きしめられた。喉が引きつるような音がした後に、小さく長い嗚咽が続く。私は手の平で女の背に触れた。嗚咽の高低に合わせて、微妙に変化する揺れを感じた。

嘘を吐いてごめんなさい。女は言った。私はただ、カーテンから漏れる光を目を細めて見ていた。薄い布から差すものは淡く、隙間から覗くものは水のように歪んで光っていた。私は緩やかに確信していく。

ここにいるのは、盗人でも少女でも、叔父の妻でも恋人でもない。

哀しい人だ、と。

「高校を卒業して、専門学校に通うために上京した私は、小さな雑貨屋でアルバイトをしていたわ」

女はポツリポツリと語り始めた。私達の体はすでに離れていた。それでも腕の力を弱められずにいる。女がいつ倒れ掛かってきても支えることが出来るように、私は緊張を解かなかつた。部屋全体を包む落ち着いた色彩も、ドライフラワーの香りも、何も感じない。透명한空気の中で、女の息だけが私をつかんでいた。

「叔母がやっている店だったの。彼女は旦那さんを早くに亡くして、一人いた息子は私より二つ年上。地方の大学に通っていて、叔母は一人になってしまっていたから。私が一緒に暮らして、店も手伝った」

そのアルバイトの経験が役に立ったわ、と女は笑った。「あの日も、いつものように店番をしていた。店を開いているのは、五時半までなんだけどね、あの頃の私はいつもボーっとしていて。カウンターのところで本を読んでいたら、六時も過ぎてしまう、なんてことがよくあった。あの人が来たのも、私がボーっとしていたからよ。

冬の、とても寒い日だった。ドアベルの克蘭克蘭という音で、我に帰ったわ。ショーウィンドウから覗く空は真つ暗だった。通りの街灯が、歩道の煉瓦を白く照らしていた」

いつの間にか女は目を閉じている。記憶を内包して膨

らむ目蓋。その緩やかな曲線の中に、彼女の夜が眠っている。私には花の蕾を開くように、それを覗き込むことが出来た。肌寒さ、カウンターに突いた肘の痛み。蛍光灯の音が聞こえる程の静寂。木の棚に並べられた食器の白、グラスの湾曲。そこにあったのは、少しでも息を吹きかければ壊れてしまうジオラマのようなものだった。私は半分開いていた口を閉ざす。

「私は少し慌てたけど、でもいつもと言えはいつものことだから。特にうろたえもしないで、いらつしやいませと言ったの。大きな声じゃなかったわ。あんまり張ったような声じゃ駄目、耳に触れる程度に、叔母はよく言っていたから。」

木の床を歩く革靴の音がよく聞こえた。店には何の音楽も掛かっていなくて、静かだったわ。靴音はぐるぐるとゆっくり店内を巡っていた。不思議ね。その時から私、どきどきしていたの」

ぐるぐる。また、カードの言葉。

「少し掠れたような、いい音だった。それはだんだん私の方に近寄ってきて、あの人が現れた」

叔父はこう言ったという。

「やあ、どうも。いい店だね。こういう落ち着いた雰囲気はいいね。時間の止まったような」

時間の止まったような。その一言が耳に残る。

「私びっくりしたの。若い男の人だったから。この部屋

にあるものみtainな感じの雑貨を売っていてね。だから、びっくりした」

微かに笑いを含んだ声に、胸が痛んだ。これからどうなってしまうか、知っているはずなのに。少女のような態度が哀しかった。

それから叔父は時々、店を訪れたという。何か買うことはなかった。いい年の男が一人、こんな可愛い店に通うなんて、と照れて笑っていた、と女は言った。そして時間の止まった店の静寂に耳を澄ませたという。二人で。「それから、とにかくいろいろあったのよ。叔母が病気で店を続けられなくなって、一人息子が就職しに戻ってきて。私は、あの人と暮らすようになった」

誤解のある言い方よね、と女は寂しげに笑った。訝しげな表情をきつとしていたであろう自分が、嫌になった。「息子さんが来ると、ちよつとそこにいられないような感じになってね。最初からずつといるつもりではなかったし、親の勧めもあつて、叔母のもとを離れたわ。そして私が新しく住む場所を探している時、偶然あの人に会ったの。それで、不動産屋の案内で、あの人とこの部屋を見に来た。それからよ。あの人がここにふらりと、現れるようになったのは」

自分が家賃を払うから、時々ここを訪ねるのを許して欲しい。叔父はそう頼んで、女はその通りにした。何も知らない人に——私は出かかった言葉を喉の奥で殺した。

「週に一度、一時間程来る時であれば、一週間、一ヶ月、半年、それ以上の間ずっとここで寝泊りしていた時もあった。あったのよ。名前のある関係になれると思った時もあった。でも」

女は言いよどむ。濡れた睫毛が震えた。少しの静寂と、聞き取れないぐらい小さな嗚咽の後に、

「もう、あの人はここに来ない。今日で、丁度一年経った」

予想的中した。女は眠るように目を閉じたまま、私に倒れ掛かってくる。肩で体を受けとめるようにして、背に腕を回した。ジンとした熱が、子供のようだと思った。

どれくらい、経つだろうか。姉妹のように抱きしめ合っていた私達は、どちらともなく腕を解いた。それから寄り添って、部屋を出る。私の背を押したのは女だったが、私は自分が彼女を導いているのだと思った。靴を履く。扉を開ける。

踊り場に出た私達を待っていたのは、降り注ぐ夕日だった。

「きれい」

私か女、どちらかが呟いた。どちらが呟いたのかわからなかった。

何ものにも遮られることなく、オレンジの光がガラスの中に注ぎ込まれる。四角いガラスの縁に立っているのだと思った。ほの甘い液体が足下で揺れている。久し振りに美しい夕日を見た。

「踊りましょう」

言われて私が振り向いた時、女はもう動いていた。すぐさま扉の奥へと消えていき、それからしばらくして戻ってくる。女は何かを腕に抱えていた。それを踊り場の隅に置き、いじり始める。音楽が流れた。女が持つてきたのはレコードプレーヤーだった。赤茶色の箱の上で、真つ黒い円盤が回る。流れるのは、すっかり磨かれた木目のように煌いたクラシック。聞いたことのない調べが体の中に入ってくる。

私達はグラスの縁にいた。

女は私の右手を、私は女の左手を握る。空いた方の手をお互いの腰に回した。そしてゆつくりと、足を踏み入れる。ほの甘い、オレンジ色の液体の中へ。

平行線に合わせて。

ぐるぐる。ぐるぐる。回って回って。

溶けるように底の方に沈んで、また、浮上して。

階段を下りたり上ったり、踊り場でターンしたり。型のないでたらめな踊りだった。次にどう動くのか頭の中でまったく決めないで、ただ音楽とオレンジの光を楽しむ。二人で、平行線の上を滑っていく。

私は女の唇が光に輝くのを見ていた。時々転びそうになりながら、お互いの熱と熱を近づけ合う。カランと氷を鳴らすようにお喋りをした。

「誰か人のことを毎日、毎日、考えているのってどういう気持ちですか？」

「それは人によると思うわ」

腰に回された手に力が入る。くるっとターンした。

「私一人の口で、一つのことを断定してはいけないのよ。それには頭のよさと、自信が足りなさ過ぎる」

この人は昔、頭がよくて自信がある時も、あったのではないかと思った。永遠に似た時間は降り積もって、いつしか真ん中からねじれていく。それは8の字のように、汗で滑りそうな手を、私は強く握り直した。

「そういえば昔、あなたに会ったことがあるような気がする。この部屋に赤ん坊をつれてきた夫婦がいた。あの人は、かわいいと笑っていたわ」

何年前ですか、と聞く。女が数字を言った。私は頷く。

前髪が一段上にいる女の胸に触れた。

「あなたのお父さんは勘違いをしたのね。ここはもう、あの人の家じゃないのに」

言ってから女はくすりと笑って、

「ああ、違うわ。悪いのはあの人。新しい住所を教えなさい、あの人が悪いのね」

と続けた。弓形に引きつって、唇が揺れる。バイオリ

ンが高音で長く響いた。耳を裂くようだった。ガラス張りの中に音が反響する。

私はこの階段が作る美しい形について言及していた。初めて見た時の感動を率直に述べる。心にすつと控えめに、けれども的確な温度で差してきた歓喜について。その後ポツリと、思ったことを言う。

「数学とか、出来ないからよく分からないんですけど、きれいって思うんです」

「そうね」

「全然、分からないから、焦がれるんでしょうか」

「そうね。そんな関係だったらよかった。私とあの人も」  
疑問が顔に出ているのだろうか。女は私の目をチラと見てからつけ足した。先程までの涙が嘘のように、それは冷静な声音だった。女の割と低い声が曲の隙間からとうとうと流れる。

「私とあの人は同じ角度の平行線だった。まったく違う線や点であれば、少しでも角度が違ったなら、そんな風に思えたのかもしれない。単純に、思い合えたのかもね。でも違った。私達は同じ角度の平行線だった。」

時間の止まった『永遠』をどちらも求めていたの。重なることは出来ても交わることが出来ない。二つの線だったのよ」

「交わる必要があるんですか？ 重なるだけ……」

「いいえ、駄目なのよ。駄目だった。それだと一つの図

形も作れずに、終わってしまう。あの人は、それが嫌だった。私の持つ『永遠』に留まり続けることが、あの人には耐え切れなかったのよ。一緒にいればお互い駄目になる。あの人、よく言ってた」

女のパンプスの踵が、リノリウムにコチンと当たる。踊りは続いていた。

「それじゃあ、あなたは……変わるんですか？ 『永遠』を捨ててしまうんですか？」

声が震えるのを自覚した。紅茶の染みが消えれば、あの部屋は味気ない白だ。アイボリーのテディも、頬に涙をはりつけたピエレットも行き場をなくす。8の字は相對する美しい円をなくして、ねじれだけを露出する存在に……。

腰を抱いた指に力がこもり、服にぎゅつと皺をつけた。女の顔を見ることが出来なかった。私は何も言えない。一年間ずっと、毎日、自分以外の誰かを思った人には。平行線が角度を変えたいと望むことを、止める権利なんてない。美しく真っ直ぐに生きていくことは、辛過ぎる。

「捨てないわ」

沈黙が長すぎて、私は自分が質問したことすら忘れていた。声が返ってきた時、ただ驚きから伏せていた顔を上げた。

オレンジだった光がいつの間にか赤に変わっている。階段の途中で私達は足を止めていた。女の顔が半分だけ

夕日を受けている。照らされている方も、影になつてい

る方も、どちらの目も美しいと思った。

「迷ったわ、ずっと。一年間。でも、決めたの。私は曲

がらない。いつまでも真っ直ぐな平行線だつて、どこかに行けるって信じてたいの」

リン、と声が輝いていた。その透明な煌きは女の口から漏れて浮上する。そのまま上へ上へと浮かんで、ほの甘い液体から抜け出していくのを、私は見た。

そしてあることを思い出し、聞いた。

「あなたの名前は？」

瞬間、曲が終わる。後に残る余韻を少しだけ聞いてから、女はたった二文字を呟いた。

「アイ」

私達はしばらくそのまま動かなかった。

グラスはもう、空っぽだった。

腰からは手を離れたが、繋いだ方は離せなかった。足音を合わせて、ゆつくりと階段を下りる。回転扉を抜けた時に、手を解いた。私は女の方に振り返る。

「誕生日のプレゼントに、叔父から、テディベアを買ったことがあります」

私は紫の小花柄を持つ、彼女の名を告げた。金色のプレートに彫られた、アルファベット二文字。女の目が見

開かれる。

ぼくのテディ。

女から貰ったものを姪である私にプレゼントした。それがもたらすものが、幸いなのか、それともただ残酷であるのか。真意は分からない。けれど私は、十年前に一度見た、あの優しい笑顔しか知らないのだ。

厄介な人ですね。

思わず声に出したら、女は笑った。真実を確かめるのは彼女の役目だ。私も自然に微笑むことが出来たから、踵を返す。後ろで女がありがとうと言った。続いて、ガラスの扉が回る音。私は振り返らない。

彼女は叔父に会いに行くんじゃないかと思った。

一人、帰路を歩く。

風は冷たく、行く道は暗い。

春はまだ始まったばかりだと、自分に言い聞かせた。この、平行線の季節は。